

## 自ら読みを深める子どもを育てる国語科学習指導 ～「問い」を生かした単元構成の工夫を通して～

### 要約

平成25年「第2期教育振興基本計画」において、「自立、協働、創造」の3つのキーワードが示された。学校教育において、当然育むべき資質、能力、態度である。しかし、本学級の子どもたちは、文学的文章を読む際に、「〇〇は、どんな性格かな」「この言葉から、どんなことが思い浮かぶかな」といった、教師が提示した課題を受動的に読み、自分の考えをつくるには至っていない。さらに、自分の考えを活発に表現し合うことができていない実態である。

そこで、国語科の文学的文章を読む学習の「つかむ段階」で、子どもたちが文章を読んで、疑問に思ったことや知りたいことを「問い」としてもち、「つくる段階」以降で、叙述をもとに「問い」の答えを明らかにしていくという単元構成を工夫した。そうすることで、課題意識をもって、主体的に読む子どもを育てたいと考え、「自ら読みを深める子どもを育てる国語科学習指導」をテーマとして設定した。具体的には、文学的文章において、以下の4点から具体的な支援を行い、研究をすすめた。

#### ① 初発の感想に書かせた「問い」の分類

読みのめあてをつくるために、初発の感想に書いた「問い」进行分类する。

#### ② 単元構成の工夫

「問い」をつくり、その「問い」の答えを明らかにするために、自分の考えをつくり、交流によって明らかにしていくという単元構成を工夫する。

#### ③ 1時間の学習過程の工夫

叙述に立ち返って、自分の考えを明確にもつことができる学習過程を工夫する。

#### ④ 問いに対する考えを明らかにするノートの工夫

めあてに対する自分の考えと、その考えの根拠となる叙述、考えの理由を明らかにすることができるノートを書かせる。

実践の結果、以下のような成果（○）と課題（●）を得た。

- 疑問に思ったことやもっと知りたいと思ったことなどの「問い」を初発の感想でもたせたことは、課題意識をもって意欲的に読むことができるようにする上で有効であった。
- 子どもたちの「問い」からつくった読みのめあてを解決していくという単元構成の工夫は、子どもたち自らが、学習の見通しをもって、読むことができるようにする上で有効であった。
- 「問い」を解決していくために、叙述に着目することができるようなしかけを提示したことは子どもたちが叙述に立ち返り、「問い」に対する答えを自分の言葉で表現することができる上で有効であった。
- 自分の考えを明らかにするノートの工夫を行ったことは、叙述に着目して想像をふくらませ、自分の考えをつくることができるようにする上で有効であった。
- 叙述により着目させるための発問や動作化などの工夫
- 自分の考えを自信をもって伝えることができるようなペア交流の工夫

キーワード：問い しかけ 分類

# 1 主題設定の理由

## (1) 社会の要請から

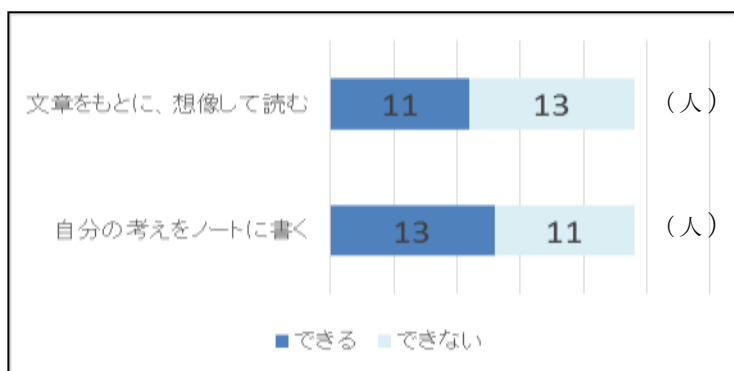
平成25年「第2期教育振興基本計画」において、今後の社会の方向性を3つのキーワードで示された。それが、「自立、協働、創造」である。この3つの条件が整った社会で子どもたちを生涯にわたって育てていくことが求められている。学校教育においても、当然育むべき資質、能力、態度である。この「自立、協働、創造」を学習過程で考えると、課題解決のために自ら考えを明確にし（自立）、他者と学び合う活動を通して（協働）、価値ある学びを生み出していく（創造）という学習の姿だと考える。このように、育てたい資質、能力やめざす学習像から考えると、課題意識を明確にして、自ら読みを深める子どもを育てる本研究は、意義深いと考える。

## (2) 中学年国語科学習のねらいから

小学校学習指導要領国語編では、第3学年および4学年の「C読むこと」の目標として「場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述をもとに想像して読むこと」と書かれている。つまり、ねらいに応じた適切な叙述を選択し、場面の变化や登場人物の言動、情景などの叙述から、想像したり、自分なりに考えたりすることが大切である。問いを解決するという課題意識をもち、叙述をもとに想像したり考えたりして、根拠を述べながら、自分の考えを表現していく本研究主題は、中学年国語科の「C読むこと」のねらいと合致する。

## (3) 児童の実態・指導上の課題から

第4学年である本学級の子どもたちは、登場人物の性格を想像したり、叙述の中の言葉から思い浮かぶ様子を想像したりする学習においては、ほとんどの子どもが自分の考えをノートに書くことができる。しかし、子どもたちのノートを分析すると、**図1**のように、叙述をもとに根拠を明確にして自分の考えをつくることが不十分である。また、書いた自分の考えを活発に表現し合うことができていないという実態がある。つまり、子どもたち自身に、読むことへの課題意識や目的がなく、「○○はどんな性格か書こう。」「この言葉から、どんなことが思い浮かぶかな。」といった教師が提示した課題に受動的に取り組んでいるだけにとどまっていると言える。さらに、子どもたちが明らかにしたい課題をもって意欲的に叙述に向き合い、叙述をもとに根拠を述べながら自分の考えを表現できるようにする必要がある。そこで、国語科の文学的文章を読む学習の「つかむ段階」で、子どもたちが文章を読んで、疑問に思ったことや知りたいことを「問い」としてもち、「つくる段階」以降で、叙述をもとに「問い」の答えを明らかにしていくという単元構成を工夫することで、課題意識をもって、意欲的に読むことができるようにしたいと考え、本主題を設定した。



【図1 実践前の実態調査】

## 2 研究主題の意味

### (1) 主題「自ら読みを深める子ども」について

#### ① 「読み」とは

叙述を手がかりにして、登場人物の気持ちや場面の様子、情景を関連付けながら、作品の世界を具体化する言語行為である。

#### ② 「自ら読みを深める」とは

児童自身が「もっと読みたい」「もっと深く知りたい」という願いを膨らませて、その願いを実現するために課題意識を明確にして意欲的に叙述に向き合い、課題を明らかにするための適切な叙述を選択することである。そして、人物の変容や情景の意味、出来事の因果関係をとらえることである。

### (2) 副主題「『問い』を生かした単元構成の工夫」について

#### ① 「問い」とは

各場面の様子、登場人物の言動や気持ちの変化、作者の表現の仕方に対してもった疑問のことである。

#### ② 「『問い』を生かした単元構成の工夫」とは

この「問い」づくりを単元計画の「つくる段階」に位置付ける。文章を読む際に、初発の感想だけではなく、「なぜだろう」「もっと読みたい」「もっと深く知りたい」と願いを膨らませてつくった「問い」とその答えの予想を自分なりにもたせておくことによって、課題意識をもって意欲的に学習に取り組んだり、叙述にこだわって読んだりすることができる。考える。「ふかめる」段階では、子どもがつくった「問い」の答えを明らかにするために、叙述をもとに想像したり、考えたりしていく。

自ら読みを深める子どもの具体的な姿とは、以下のような姿である。

#### 「自ら読みを深める」具体的な子どもの姿

- ・ 課題意識をもって叙述に立ち止まり、「もっと読みたい」「もっと深く知りたい」という願いから、問いをつくる子ども
- ・ 読みの課題をとらえ、学習の見通しをもつ子ども
- ・ 叙述から想像したことや考えたことを自分の経験と合わせながら、問いに対する答えを自分なりの言葉で表現できる子ども
- ・ 作品のよさを、友だちと話し合ったり、紹介し合ったりできる子ども

## 3 研究の目標

国語科の文学的文章を読む学習において、自ら読みを深める子どもを育成するため、「問い」を生かした単元構成の工夫の在り方を究明する。

## 4 研究の仮説

国語科学習指導における、叙述をもとに想像したり考えたりする学習において、「問い」を生かした単元構成の工夫を行い、課題意識をもって叙述を読むことによって、自ら意欲的に読もうとする子どもを育てることができるであろう。

## 5 研究の概要

### (1) 検証の対象

大刀洗町立大刀洗小学校 第4学年1組（男子5名、女子19名、計24名）

### (2) 検証の内容と方法

めざす子どもを育成するために、以下のことに重点をおいて取り組む。

#### ① 初発の感想に書かせた「問い」を分類する

##### ○主題にかかわる「問い」

ここで分類した「問い」から、単元を通した読みのめあてや各時間のめあてをつくる。

##### ○読んで解決できる「問い」

ここで分類した「問い」は、読めばわかる「問い」である。読み深めていく上でのめあてにはならないため、一緒に読みながらこの時間に解決する。

##### ○読んでもすぐに解決できない「問い」

ここで分類した「問い」は、読んでも分からない「問い」である。そこで、叙述に書かれていないことを確認し、想像して読むことを伝える。

#### ② 単元構成を工夫する（図2）

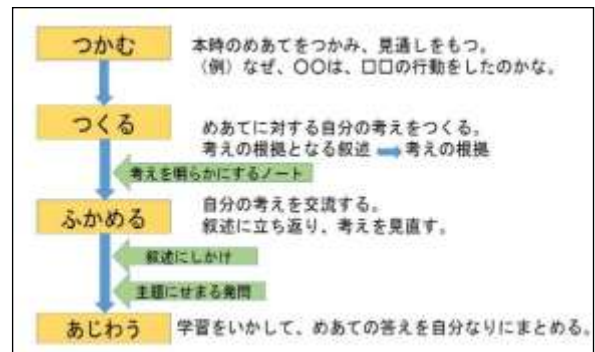
つかむ段階では、文章を読み、「疑問に思ったこと」「不思議に思ったこと」「もっと知りたいこと」などを初発の感想として、自由に書かせる。次に、つくる段階では、感想や問いを交流し、単元を通した学習課題（めあて）をつくらせ、学習の見通しをもたせる。そして、ふかめる段階では、叙述をもとに、めあてに対する自分の考えをつくり、自分の考えを明らかにしていく。また、考えを交流し、めあての答えを、自分なりにまとめさせる。あじわう段階では、「問い」を解決することを通して深まった読みを生かして、作品のよさを紹介する文章を書く。



【図2 「問い」を位置づけた単元構成】

#### ③ 1時間の学習過程を工夫する（ふかめる段階）（図3）

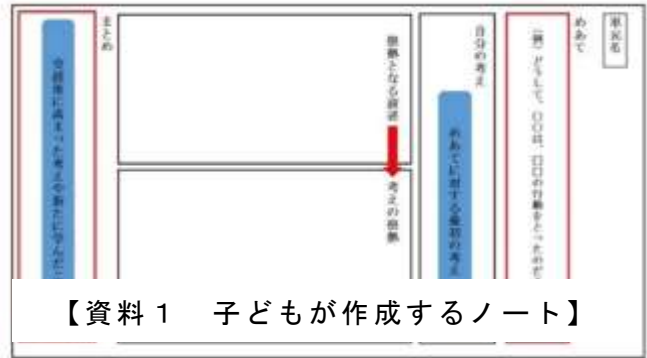
特に、つくる段階とふかめる段階に工夫をする。つくる段階では、問いに対する自分の考え、根拠となる叙述、考えの根拠をノートに書かせることで、適切な叙述を選択しながら、自分の考えをつくることができるようにする。ふかめる段階では、考えを交流することで、自分では気付かなかった考えに気付いたり、叙述にしかけをして提示し、主題に迫る発問をすることで、登場人物の思いや、作者の意図を明らかにしたりすることができるようにする。



【図3 1時間の学習過程】

④ 問いに対する考えを明らかにする  
ノートの工夫（資料1）

「問い」の答えを明らかにするために、資料1のようなノートを、毎時間書かせる。このノートは、めあてに対する自分の考えと、その考えの根拠となる叙述、考えの理由を明らかにすることができる。また、最初の自分の考えと、交流後の考え（まとめ）とを比較することができ、自分で読みが深まったことを実感することができる。

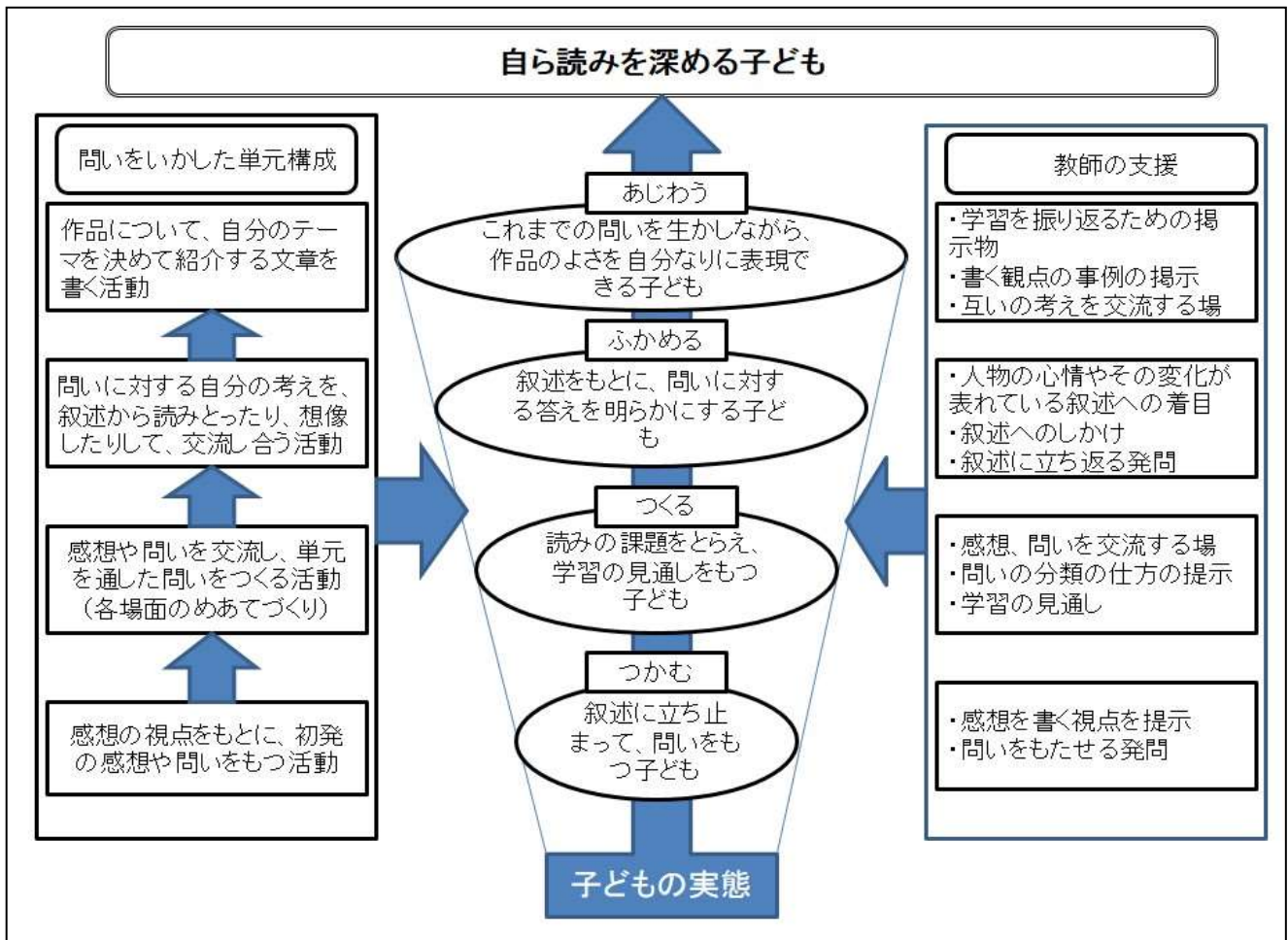


【資料1 子どもが作成するノート】

6 研究の計画

月	研究計画	月	研究計画
5	研究主題の設定、理論研究	10	検証授業（実践2）
6	研究主題の作成、理論研究	11	仮説の見直し、データ分析
7	教材研究、検証授業（実践1）	12	データ分析とまとめ
8	教材研究	1	研究のまとめ・報告書作成
9	指導案作成	2	研究報告

7 研究構想図



## 8 研究の実際

実践事例1 平成26年6月30日 大刀洗町立大刀洗小学校 第4学年1組 22名

(1) 単元 作品を紹介しよう「一つの花」

(2) 本単元の指導にあたって

本単元の指導にあたっては、ゆみ子のことを大切に思うお父さんとお母さんの気持ちを、叙述をもとに想像して読み、自分の言葉で表現することができる子どもを目指した。そのために、初発の感想をもとにつくった問い(読みのめあて)に対する自分の考えを、叙述を根拠にしながらかつづけていき、自分の言葉で問いの答えをまとめる活動を行った。

(3) 指導の実際

### ① つかむ段階(1/9)

この段階では作品「一つの花」との出会いから、「初発の感想の視点」をもとに、子どもたち自らが解決したい「問い」をつくることがねらいである。

まず、題名「一つの花」から思い浮かぶイメージを子どもたちに問いかけ、その後、教師が範読をした。そして、資料2のように「初発の感想の視点」を提示し、初発の感想を書かせた。(資料3)子どもたちは、題名「一つの花」について、「世界に一つの花かな。」「さみしい感じがするな。」など、イメージを膨らませていた。範読を聞いた後、10年後、ゆみ子の家がコスモスでいっぱいに含まれているという叙述から、「お父さんからもらった一輪のコスモスから種ができて、いっぱい広がったのかな。」などとつぶやきながら、「なぜ、ゆみ子さんの家にコスモスがいっぱいさいているのかな。」という問いをつくることができた。

### 【考察】

初発の感想を書かせるとき、特に、「問い」につながる疑問や気付きをたくさん出すことができるような「初発の感想の視点」を提示したことで、資料3に見られるように、単元を通して、自ら読み深めたい「問い」をつくることができた。

### ② つくる段階(2/9)

この段階では初発の感想や問いを交流し、読みを深めていくための学習の見通しをもつことがねらいである。まず、初発の感想で書いた子どもたちの「問い」や感想を出させた。そして、子どもたちが出した問いを資料4のように分類した。子どもたちは、全員が読み深めたい「問い」を出した。そして、全員で次の「問い」をつくった。(資料5)

・読んで、思ったことや考えたこと

・読んで、なぜだろう、知りたいなと思ったこと(問い)

### 【資料2 初発の感想の視点】



【資料3 初発の感想】



【資料4 一つの花「問い」一覧】

- 1の場面…お母さんはゆみ子が「一つだけちょうだい。」といったらあげるのはなぜ。
- 2の場面…お父さんがゆみ子をめちゃくちゃに高い高いをするのはなぜだろう。
- 3の場面…お母さんがお父さんにゆみ子の泣き顔を見せたくなかったのはなぜだろう。
- 4の場面…お父さんがゆみ子に一輪のコスモスをあげたのはなぜだろう。
- 5の場面…ゆみ子さんの家がコスモスでいっぱいに含まれているのはなぜだろう。

### 【考察】

### 【資料5 子どもと一緒につくった「問い」】

子どもたちの初発の感想から出た「問い」を資料4のような観点で分類して、子どもと一緒に、読みのめあてを設定したことは、単元を通して読み深めていくための学習の見通しをもつことができた。

③ ふかめる段階 (3/9～7/9 本時7/9)

この段階では場面ごとに整理してつくった「問い」からめあてをつくり、めあてに対する自分の考えをつくり、新たな「問い」から作品を読み深めることがねらいである。まず、ゆみ子がお父さんと別れてから10年後の場面である5の場面を音読後、今までと変わったことを友達と話し合わせた。子どもたちは「ゆみ子がお昼ごはんを作れるくらい大きくなった」「ゆみ子の家の周りにコスモスの花がたくさんさいている」とゆみ子や時代の変化に着目した。次に、コスモスの花に着目させ、子どもが初発の感想で書いた「なぜ、10年後ゆみ子の家の周りにコスモスがいっぱいさいているのか。」という問いを、読みのめあてとして提示をした。子どもたちは、読みのめあての答えを明らかにしていくために、資料6のように、ノートに自分の考えをまとめた。それから、交流後、資料7のように叙述のコスモスをひまわりに置換して、子どもへ提示した。子どもたちは、叙述を置換することで、「コスモスがお父さんの証としてゆみ子を見守っている」と、ひまわりとの違いから考えを深めることができた。最後に、読みのめあての答えを自分の言葉でまとめさせた。子どもは、「コスモスは、お父さんの思いで、ゆみ子はお父さんに包まれている」と自分の考えを深めることができた。(資料8)



【資料6】子どもの考え



【資料7】置換した叙述

【考察】

まとめを自分の言葉で書くことができた子どもは、22名中19名で、そのうち、学習の初めに書いた自分の考えに付け加えをしたり修正をしたりして、考えに高まりが見られた子どもが7名であった。このことから、場面ごとに整理してつくった「問い」からめあてをつくり、自分の考えをつくることに課題が見えた。根拠とする叙述から分かることを考えるノート指導が必要だと考える。

④ あじわう段階

この段階では、学習を生かして、「一つの花」の紹介文を書いた。「登場人物について」「親の子への思い」などのテーマを決め、今までの学習を想起させて書かせた。

【考察】

学習の中で、読みのめあてに対する答えを自分の言葉で書いたものを生かして、紹介文をかくことができた。



【資料8】まとめ





【考察】

子どもたちの初発の感想から出た「問い」を資料10のような観点で分類をして、自分たちで場面ごとに読みのめあてをつくらせたことで、単元を通して読みを深めていくための学習の見通しをもつことができた。

③ ふかめる段階（3/10～7/10 本時5/10）

この段階では、叙述に立ち返り、ごんの気持ちの移り変わりを想像して読み、自分の言葉で表現することがねらいである。

まず、本時の学習課題（めあて）を提示した。そして、資料12のように、めあてに対する自分の考え、考えの根拠となる叙述、考えの根拠をノートに書かせた。（写真1）

子どもたちは、「なぜ、ごんは毎日毎日、兵十にくりや松たけを持っていったのだろう。」というめあてから、「兵十のおっかあが自分のせいで死んだから、そのおわびがしたかった。」「いわし屋になぐられてけがをしてかわいそうだったから。」といった考えを出した。

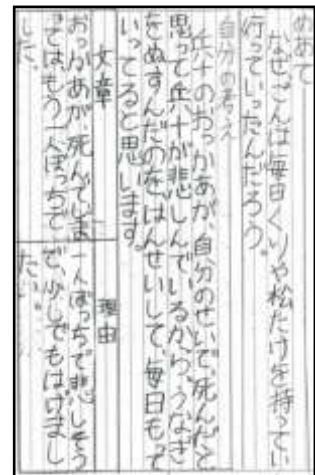
次に、考えの交流後、資料13のように、「置いて」という叙述を「投げこんで」に置換して、子どもへ提示した。

子どもたちは、「置く」と「投げこむ」の言葉の違いを考え、兵十のために、物置の入口まで近づいて心を込めてくりを置いたごんの思いに気付くことができた。それから、めあてに対する答え（まとめ）を書かせ、交流をさせた。最初、「うなぎをぬすんでしまったことを反省して、つぐないのために、毎日毎日持って行った。」と読んでいた子どもは、「兵十のために、少しでも、励ましてあげたい、優しくしてあげたいと思うようになった。」と、ごんが心から兵十のために何かしてあげたいと思うようになった気持ちの変化に気づき、自分の考えを深めることができた。（資料14）

【考察】

24名全員が、まとめを自分の言葉で書くことができた。そのうち、学習の最初に書いた自分の考えに付け加えをしたり、修正したりして、考えに高まりが見られた子どもは、16名であった。

このことから、適切な叙述を選択し、叙述に立ち返って想像することができた。



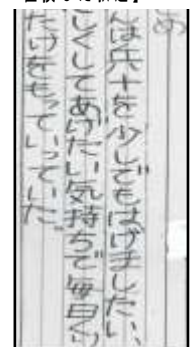
【資料12 子どもの考え】



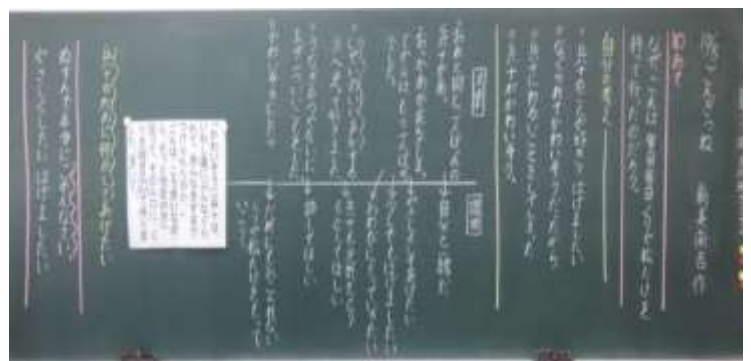
【資料13 置換した叙述】



【写真1 考えをつくる子ども】



【資料14 まとめ】



【写真2 授業の板書】

